



高知県立牧野植物園提供

牧野富太郎が歩いた 「国有林」～白髪山編～

草花を巡る随筆とともに

令和5年 10月7日(土) ▶ 令和6年 3月31日(日)



昭和25年頃 大原富枝

わたし(作者大原)の家では、
牧野富太郎博士のことを、
いつも牧野先生と親しんで、
父の小学校時代の先生と
して呼んでいた。
『草を薙に 小説牧野富太郎』より

こうちミュージアムネットワーク



らんまんの舞台・高知

牧野博士の
新休日

Dr. Makino's New Holiday in KOCHI

巡回パネル展 同時開催

高知県内の「植物」「自然林」「里地・里山」
「気候」「地形と地質」の環境分野の現状を
紹介しています。

開館時間 | 午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)
休館日 | 月曜日(祝・祭日の場合は翌火曜日)
入場料 | 一般・大学生/300円(240円)
小・中・高校生/100円(80円) ※ ()内は、団体20名以上料金

■身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳及び被爆者健康手帳をお持ちの方とその
介護者、高知県又は高知市長寿手帳をお持ちの方は入館料が免除となります。窓口にお問い合わせください。

主催：大原富枝文学館 本山町教育委員会 本山町
後援：四国森林管理局、高知県、(公財)高知県文化財団、高知県教育委員会、高知新聞社、NHK高知放送局、RKC高知放送、KUTVテレビ高知、
KSSさんさんテレビ、(公財)高知県観光コンベンション協会、本山町観光協会、朝日新聞、毎日新聞、読売新聞

大原富枝文学館

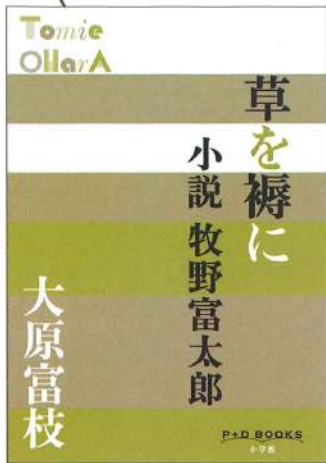
〒781-3601 高知県長岡郡本山町本山568-2 TEL/FAX 0887-76-2837
<https://oohara-tomie-bungakukan/>





牧野富太郎が歩いた「国有林」～白髪山編～

草花を巡る随筆とともに



『草を褥に 小説牧野富太郎』小学館P+D BOOKS (2023年3月14日発行)

『草を褥に 小説牧野富太郎』で牧野富太郎と妻寿衛の物語を描いた大原富枝は、「風呂の焚き付けにされるほど、私も植物標本に熱中したものです」と語り、自身も植物学に興味を持っていました。「柗の花」「えびね」「曼珠沙華餅」若楓「さきくさの花」など、草花を巡る随筆も数多くあります。それらの随筆を紹介するとともに、冬期の大切な収入源であった三極や楮など、植物と共にあった嶺北の暮らしをたどります。

四国森林管理局の全面的なご協力をいただき、「牧野富太郎が歩いた『国有林』～白髪山編～」をパネル展示、高知林友会発行の会報誌「高知林友」から博士の人物像と本山町での足跡をたどり、白髪山(現・高知県本山町)の根下がりにヒノキや白骨林について紹介します。

※高知林友会：大正3年7月に職員の会費制度により発足。毎月1回「高知林友」誌を発行し、職員相互の意志疎通・和調協調・信頼感を深めるとともに、殊に、林業技術面の発表機関の性格をもって出発したもの。

牧野博士の行程

- 昭和9年8月
- 5日 高知発、田野貯木場を經由し、魚梁瀬営林署管内の西川事業所泊
 - 6日 千本山保護林で指導調査、魚梁瀬営林署管内の石仙泊
 - 7日 午前、石仙で採集・鑑定の上、午後高知へ
 - 8日 高知から本山を經由し、本山営林署管内の白髪山作業所泊
 - 9日 白髪山国有林で指導調査し、本山町泊
 - 10日 俣全山の植物調査を行い、高知に戻る
- 高知林友 第171号「植物学界の権威 牧野博士の指導日程」より

会期中、展示物の入れ替えを行います。



牧野富太郎掛軸



土場があった吉野地区は、三極を取り扱う商店が栄え、昭和32年に大原と親交のある壺井栄(右から二人目)が和紙の取材に訪れている



昭和10年頃 森林軌道(個人蔵)



「高知林友」第172号(四国森林管理局所蔵) 昭和9年発行



白髪山の「根下がりにヒノキ」(嶺北森林管理署提供)

関連行事

10月15日(日) 11月19日(日) 「テラリウムづくり」ワークショップ
 場所/大原富枝文学館サロン 定員/①10:00②14:00(各回5名) 参加費 500円 ※入館料含

定期朗読会
 場所 本山町立 大原富枝文学館サロン 時間 14:00～
 毎月第2日曜日開催 10/8、11/12、12/10、2/11、3/10 参加費 無料 要入館料
 ※茶室 安履庵 大原富枝の会による呈茶 10:00～15:00

富枝忌
 場所 本山町 プラチナセンター 日時 1月21日(日) 14:00～ 参加費 無料
 朗読 「寿衛子夫人の存在」:朗読サークル「潮騒」
 解説 「草を褥に 小説牧野富太郎執筆の背景」:学芸員
 座談会 「大原富枝生誕111年・文学館開館31年をふりかえって」